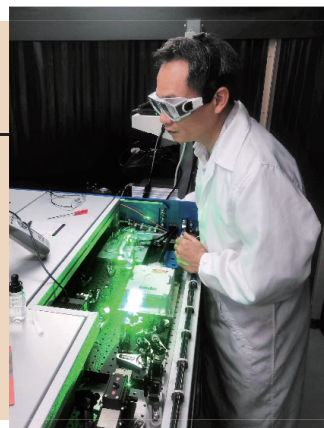




藤 貴夫 豊田工業大学大学院工学研究科 教授
(前 メゾスコピック計測研究センター 准教授)

分子研を去るにあたり

ふじ・たかお／1999年3月 筑波大学大学院工学研究科博士課程修了、博士（工学）取得、1999年4月 東京大学大学院理学系研究科・助手、2002年5月 ウィーン工科大学・JSPS 海外特別研究員、2004年5月 マックスプランク量子光学研究所・研究員、2006年4月 理化学研究所・研究員、2010年2月 分子科学研究所・准教授、2019年4月 豊田工業大学・教授（現職）。



2018年の3月に家で誕生日祝いをしてもらったとき、妻に「今度の歳の目標は？」と聞かれた。「引越え」と言って、その場の雰囲気が一気に暗くなった。1年後、本当にそれが実現してしまい、2019年の3月は段ボール山積みの部屋の中で誕生日を迎えた。そんな中でもまた祝ってくれた家族に感謝したい。

今回で転職は5回目になる。研究者の中でも少し多めぐらいだろうか。新しい職場に移ると、必ずカルチャーショックをうける。今回は、岡崎から名古屋ということで、今までで一番近距離の移動だったが、職場の質の変化としては、一番大きいかもしれない。これまで研究所勤務が長かったため、大学の考え方、特に私立大学の考え方を理解するのにかなり時間がかかりそう。今はまだ研究室の立ち上げといった分子研で経験のある業務に集中することができるが、講義などの学部の業務が増えてくると、今まで経験したことのない困難と対峙することになるだろう。そして、それを乗り越えたときに、また、自身の成長を実感できることが楽しみである。

分子研に来てから、成長したのはど

んなところだろうか。やはりグループリーダーとなったことで、研究の取り組み方が大きく変わったと思う。研究室主宰者でない准教授と比べて、自分で研究室を進めていく力というのは間違いなく鍛えられたと思うし、それが今回の教授職への採用につながったと考えている。

分子研に着任したばかりのころは、自由度が高すぎて、何から手をつけていいかわからなくなることがあった。幸い、理研で中途半端になっていた赤外光パルス発生のテーマがあったので、それを発展させるということで、道筋を決めることができた。それから9年間で、サブサイクル中赤外光パルス発生、チャープパルス上方変換、光電場波形計測法、ファイバーレーザーの研究で、高く評価される成果を出すことができた。特に、光電場波形計測法は、大学院生のころから実現したかったことであり、それを自分の主宰する研究室でできたことは、研究者冥利に尽きると思う。また、このような研究が新天地でできればいいと思うし、そうした研究の面白さを学生たちに伝えていきたい。

最後に、分子研の皆様、特に藤グルー

プのレギュラーメンバーであった野村君、白井君、Ali君、熊木君、伊藤君、増田さん、川合さんに感謝したい。分子研で充実した研究生生活を送ることができたのはみんなのおかげです。本当にありがとう。



正岡 重行

大阪大学大学院工学研究科応用化学専攻 教授
(前 生命・錯体分子科学研究領域 准教授)

組織が躍動する力

まさおか・しげゆき／1999年同志社大学工学部卒業、2004年京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了、博士（工学）。2004年英国リバプール大学博士研究員、2005年九州大学大学院理学研究院助手、2007年同助教、2011年分子科学研究所准教授、2019年より現職。



2011年、念願になって独立准教授のポジションを得ることができた私は、大きな期待を抱いて分子研に着任しました。「恵まれた環境」という言葉だけでかたづけることのできない、何一つ不自由のない環境。広大なスペース。充実した設備。潤沢な資金。スタッフ（助教・秘書）からのサポート。教務も限りなく少なく、ほとんどの時間を研究に割くことができる。そして何より自由であり、研究の方向性について制限されることはない。まさに「研究者の理想郷」に來たのだと、いたく感動したことを覚えています。

しかし、研究室立上げ後の数年間は、かなり追い詰められていました。やってもやっても成果に結びつけることができない。自分の力の無さを痛感する日々でした。うまくいかない言い訳を環境に求めようにも、設備・資金・人材・時間・自由といった研究を進めるに必要なものが全て揃っている。そのうち、分子研から潤沢に降り注ぐ数々の支援はもはやプレッシャーに形を変え、私を苦しめる存在にさえなっていました。

もがく中、私を救ってくれたのは、近藤助教や学生さん等、グループのメ

ンバーでした。それまで私は、リーダーは組織を牽引する絶対的存在であるべきとの考えに基づき行動していました。しかし、メンバーそれぞれの個性を尊重し、信じ、頼り、彼らと一緒に色々なことに取り組む中で、私が独り相撲をしていた研究室が「個が活躍する組織」に変わり、研究室がうまく機能し始めました。結果として、着任当初に想像もしなかった新しい科学をいくつも展開することができました。また、それが研究室のスタイルとなり、国内外から学生さんが集まってくれ、それぞれが多岐にわたって活躍してくれました。8年間で24名の学生と一緒に研究することができ、それらの学生さんが計31件の受賞を勝ち取ってくれたのは、私の誇りです。

分子研での8年間は、研究室の運営者としての自分の在り方に一つの解を与えてくれた私にとってかけがえのないものです。今後も、分子研で培った体験を糧に、若者が個性豊かに力を発揮し、力強く躍動する組織を作りたいと考えています。最後になりましたが、大峯・川合両所長を始めとする分子研の皆様方には多大なご支援をいただきました。支えてくれたすべて

の方々に感謝し、ご挨拶の言葉とさせていただきます。



石月 秀貴

理化学研究所 放射光科学研究センター 研究員
(前 メゾスコピック計測研究センター 助教)

岡崎での18年間

いしづき・ひでき／2001年大阪大学大学院工学研究科電子工学専攻博士課程修了、地域結集事業雇用研究員、IMSフェローを経て、2004年10月より分子科学研究所助手（平等グループ）、2019年4月より現職。



岡崎に初めて来たのは2001年の1月だったと記憶しています（それまでも新幹線などで通過していましたが）。大学で指導頂いた先生のご紹介で、分子研の（当時の）レーザーセンター・平等グループの雇用研究員面接のため、冬の岡崎市を訪れました。名古屋に降り立つのもその時が初めてであり、「名駅」とは何かが解らず、名鉄名古屋駅で乗車する電車で迷い、名鉄電車内のアナウンスで「前後に停車します」という意味が理解できず、さらに名鉄と愛知環状鉄道との違いが分からず東岡崎駅でなくJR岡崎駅に着いてしまうという、トラブルの連続でした。

幸い無事に面接を終え雇用研究員として採用された後、分子研IMSフェロー、さらに助教（初めの頃は助手）として、計18年という長い期間をこの岡崎で過ごしました。その間に、レーザーセンター（分子制御レーザー開発研究センター）からメゾスコピック計測研究センターへの組織改編もありました。

分子研ではそれまでとは異なる新しい研究環境が揃っており、そこでは国内のみならず広く海外にまで目を広げた研究を推進するという新たな物の見

方を教えられると共に、世界最先端の研究を推進することの厳しさもまた知ることができました。そのような環境の中で、平等教授やグループメンバーの方々、多くの先生方や研究所スタッフの皆様大変お世話になりましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

自分のこれまでの研究内容を振り返ってみると、紫外線レーザーを使った薄膜堆積に始まり、光通信波長帯での非線形光学波長変換を伴う高速光信号変調、高強度非線形光学波長変換による中赤外光発生など、光波長に長短の違いはあれど非可視域の光源関連がほとんどでした。そのため、極まれに可視光域光源を利用するときに新鮮味があり楽しいのですが、新たな研究場所である理化学研究所では、またも非可視域光源に関連した研究を進める予定です。

と、ここまで書いておきながらですが、2019年4月以降も新たに特別訪問研究員として、分子研に引き続きお世話になる予定です。これは主に、平等教授が関与している社会連携研究部門に関係するためです。この冊子の発刊時には、“TILA コンソーシアム”とい

う名称の産学官連携拠点が、おそらく発足しているはずです。この組織がどのように発展していくか、本原稿執筆時点では不明ですが、分子研の皆様と引き続き良好な関係を維持しつつ、新たな展開を図る一助となるべく努めたいと思います。最後になりますが、改めて感謝申し上げますとともに、今後ともご協力頂きますようよろしくお願いします。



大迫 隆男 三井金属鉱業株式会社 主任研究員
(前 生命・錯体分子科学研究領域 助教)

分子研での研究生生活を振り返り

おおさこ・たかお／大阪市立大学大学院理学研究科 物質分子系専攻 後期博士過程修了後(2005)、米国ワシントン大学化学科博士研究員(2005-2007)、分子科学研究所 錯体触媒研究部門 助教(2008-2019)を経て、2019年4月より現職。

2008年1月より、2019年4月まで11年3ヶ月間、魚住グループの助教として勤めさせていただきました。その間、分子研レターズの編集委員を10年ほど担当させていただき、この「分子研を去るにあたり」で多くの方々を見送ってきました。この執筆依頼をいただいたときに、やっと自分の番が回ってきて、転出義務を果たしたぞという思いが一番にやってきました。

2007年、アメリカのワシントン大学でのポストドク生活も2年半が過ぎ、次を考えなければならないとき、分子研の錯体触媒部門の助教が公募しているのを見つけました。当時の私は、有機分子変換の触媒を中心に研究を展開されていた魚住先生とは面識もなく、私の専門である「錯体」というキーワードが合致しているだけで、ダメ元で公募を申し込んだのを今でも鮮明に覚えております。幸いにも採用が決まり、少しバックグラウンドが異なる私でも採用していただけた当時の分子研の懐の深さに感謝しております。

とはいっても、有機化学の常識は、分野が異なる私にとって非常識であったこともあり、初めの数年間は、その常識を習得することに大変苦労いたし

ました。また、分野が違うこともあって、一からの人脈作りなど苦戦し、「前の研究を続けていたら、こんなに苦労はしなかったのでは……」とよく思ったものです。諦めず前進を続けた結果、「ポリマー担持遷移金属触媒」、「フロー化学」、「ユビキタス金属触媒」に関する知見を積み重ね、研究成果をしっかりと挙げることができました。また、数多くの国プロにも参画させていただき、大学発の技術を産業化へという活動の中、多くの企業の方と情報交換させて頂きました。このような分子研での多くの経験により、例え、どこへ行ったとしても、産学問わず新しい分野に進んだとしてもやっていけるという強い気持ちを持てるようになりました。在任中、厳しくご指導いただいた魚住先生、一緒になって切磋琢磨した研究室のメンバー、また様々な面で支えていただきました研究所の皆様には、本当に感謝いたします。分子研での研究生生活は、私にとっての大きな財産となりました。

王道のアカデミックではなく、産業界への転出となりましたが、新しいことに挑戦し、大きな花を開かせたいと強く思っております。特に、これまで



の経験を踏まえ、産学連携に関わることができたらと思っております。今後も皆様のお知恵を借りること機会があるかと存じます。その時は、どうぞよろしくお願いいたします。

最後に、分子研の益々のご発展を心より祈念しております。



浜坂 剛 株式会社トクヤマ 研究開発部門 徳山研究所 主任
(前 生命・錯体分子科学研究領域 助教)

企業研究開発職への転身

はまさか・ごう／2008年3月 北海道大学大学院理学研究科化学専攻修了、博士(理学)。同年4月 分子科学研究所 生命・錯体分子科学研究領域 錯体触媒研究部門 魚住グループ 博士研究員(IMSフェロー)、2012年5月 同グループ助教。2019年5月より現職。



2008年4月に分子研に博士研究員として着任し、その後2012年に助教として採用して頂きました。結局、2019年4月末に退職するまで、合わせて11年1か月の長きにわたり、お世話になりました。こんなに長い間お世話になるとは全く考えておりませんでしたので(着任時は2年ほどで異動すると思っていました)、私生活も大いに変わりました(結婚し子供ができました)。分子研では、魚住教授のご指導の下、水中機能性触媒システムの構築を目指して研究に取り組みました。その中で、それまで扱ったことのない数々の装置や手法を学び、様々な方と共同研究する機会に恵まれ、自身にとって大変実り多い日々でした。

皆さんご存じのように、分子研では助教は6年を目途に転出が推奨されます。私自身も2018年に助教歴6年を超え、分子研在籍年数も10年を超えたことで、次のキャリアを真剣に考えるようになりました。それまでも公募情報は確認していたのですが、そこから、真剣に次のポジションを探し始めました。しかしながら、1年間そもそも応募できるような公募もなく、途方に暮れておりました。一方、魚住教授が採

択されておりますACCELプロジェクトへと参画する中で、企業の方とお話する機会が多くありました。それまで企業での研究についてあまり真剣に考えてこなかったのですが、お話しする中で、企業でのR & D活動もおもしろそうだと感じるようになり、企業への転出にチャレンジしました。その結果、幸いなことに、現職へと採用いただきました。企業への転職活動を通して感じたのは、企業の雇用の柔軟化と、大学など公的研究機関の雇用の硬直化です。アカデミックポジションではそもそも応募することができなかった私のような者でさえ、企業へ転職しようと探し始めれば、多くの企業に応募可能でした。私自身のことはさておき、公的研究機関でポジションを獲得することが困難となる中、企業への転出を有力な選択肢として考える時代となっていると感じます。

分子研は学術研究に集中する環境として、日本の中で屈指であると確信しています。分子研の皆さんの今後の更なるご活躍を祈念いたします。私は、産業界の片隅で何とか社会のお役に立てる製品を開発できるよう頑張っていく所存です。最後になりましたが、分

子研所属時代ご指導いただきました魚住先生、ほぼ同時期に着任し、ほぼ同時期に転出した大迫さんをはじめ、多くの方々にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。